

令和1年9月2日(火)

校長の野澤です。いよいよ2学期が始まりましたが、体調はいかがですか。始業にあたり、お話しする時間を少しだけ頂戴します。

昨日は「防災の日」でした。皆さん御存じのとおり、大正12年9月1日に発生した関東大地震にちなんで定められた日です。地震に伴って広範囲の火災が発生し、10万人以上の命が失われたと言われていますが、この地震災害を予測していた学者がいるのを御存知ですか。現在の東京大学に相当する、旧東京帝国大学の今村明恒助教授です。同じ講座の教授は大森房吉、選択科目の地学を学んだ皆さんにはお馴染みの「大森公式」に名前を残す学者です。

今村助教授はあるきっかけから、「今から50年以内に東京を大地震が襲い、そうなったときには大火災が発生して全てが灰となり、10万人以上の死者が出る。」という自らの見解を、新聞に掲載することになります。これが当時の一般人に「近いうちに東京で大地震が起こり、10万人が死ぬ。」と受け取られ、大きな社会問題となってしまいました。今村は、「地震災害に備えなければならない。」と注意を呼び掛けたかったのですが、その意図とは全く異なる伝わり方をしてしまったのです。調査のため長期出張していた大森教授は激怒し、東京に戻ると、部下である今村の説を根拠のないでたらめと否定します。専門家として格上である大森の言葉で、混乱していた世の中は平静を取り戻しますが、その結果、今村は「嘘つき」のレッテルを貼られてしまいます。大森教授としたら、世の中の混乱を収めるにはこの方法しかないと考えたからだ、という見方もありますが、今村は決して嘘などついていないのに理不尽な話です。

彼が名誉を回復するのは17年後、予測したとおりに関東大震災が起こり、その先見性が評価された後でした。しかしその間、自分の考えによる地震防災の手立てが何一つ進まず、多くの犠牲者を出したことに、今村はどれほど悔しい思いをしたでしょう。「災害予防のこと、一日も猶予すべきにあらず。」という彼の論文の中の言葉に、その思いを感じずにはられません。

生徒の皆さん、防災の日にあたり、どうかもう一度、自分自身の備えを振り返ってください。現代では、今村先生のような専門家の研究をもとに、防災の視点をもった行政の対応や都市計画が進んでいます。しかし、自らも年に一度やってくるこの機会に、御家族とともに防災に係る備えを確かめましょう。事が起これば、自分自身の命を守れるのは自分だけです。

そして願わくば、自分自身の安全が確保できた後、身の周りで困っている人を、その若い力で助けていただきたい。また、そんなことのできる心と体を、学校生活をとおして身に付け、育てていただきたいと思っています。

行事のひしめく、長くて濃厚な2学期の始まりです。お互いに気を引き締めて、良いスタートを切りましょう。終わります。